

【共同研究】

## 開発的グループに見る対人理解度の発展

. グループ内相互関係と個人内変容

臺 利夫<sup>\*1</sup>・丹治哲雄<sup>\*2</sup>・大熊恵子<sup>\*3</sup>

## The Growth of Acquaintance through the Developmental Group Approach

### .The Growing of the Group and the Individual Members

Toshio Utena, Tetsuo Tajimi and Keiko Okuma

The group dynamics of a developmental group in which the growing of the relationship between the group and the individual members is probed can be confirmed by the Interpersonal Understanding Test (Acquaintance Test Revised) and TST (Twenty Statements Test). In a previous paper, we suggested that newcomers to a group proceeded into the advanced level of group development more quickly than old-timers. In the research for this paper, we have ascertained that the Residual Quantity --the discrepancy between the actual average grade of each group member and the maximum expected grade of average --suggests better the development of their understanding. The fewer Residual Quantity is, the deeper the understanding becomes. The qualitative relation and quantitative proportion between newcomer 's and old-timer 's subgroups in a developmental group manifest a certain group character. In so far as there are, however, some members who participate positively and successively over several terms, the average Residual Quantity of the group diminishes with term. We noted that, even if the group is an open one which members can attend or be absent from freely, the 'group-as-a-whole 'may gradually respond to the growing of understanding in individual members.

前回の研究(臺・丹治・大熊、1995)では、自由意思で参加する学生たちに対して、心理劇的ロールプレイングを挿入しながら相互のコミュニケーションと自他の理解を促す、開発的グループの学習効果を見た。すなわち、

中途参加者(以下、新参加者と改称)の対人理解度得点の加速度的発展と、それによる全体としての集団の発展に伴う参加成員の自己観(TST)の変化が主題であった。そこで残された課題は、理解度と被理解度の関連複数期にまたがる集団の変化と成員の内的変化過程であった。

本研究では、主に集団の複数期にまたがる対人理解度尺度による得点の変化過程に注目

\*1)うてな としお 文教大学人間科学部人間科学科

\*2)たじみ てつお 文教大学人間科学部人間科学科

\*3)おおくまけいこ 文教大学人間科学部人間科学科

し、あわせてその過程で特定成員の行動・心理をTSTの変化と関連してとりあげた。

対人理解度尺度では最高5点に近づくと頭打ちによって増加量が減少するおそれがある。そこで理解度を一層明らかにすべく、本研究では各成員の期待最大増加量への残量を見た。新参加者（中途参加者）の増加量は概して継続参加者より大きいが残量も大きい。参加開始時に低得点な彼等が継続参加者の得点を上回る程の増加量を示さない以上、継続参加者に於けるより小さい残量は一層の理解度を表すだろう。この点はさらに後述するが、残量にも頭打ちの影響が無いとはいえない点に留意すべきだろう。

### 1. 集団別理解度の推移と特徴的成員の心理・行動

期毎に編成された集団全体の理解度・被理解度および期待最大増加量への残量を見ることにより、集団の期を追っての変化を（質的变化の予想も含めて）捉えようとした。

#### (1) 期待最大増加量への残量

このグループ活動は新学期から夏期休暇までを1つの期、さらに休暇明けから冬期休暇までを1つの期とする。当該年度が終了したり夏期休暇が終わると卒業その他の理由で何人かの成員がグループを離れるが、次の期が開始されると継続成員と新参加成員によって

あらためてグループが構成されるという、基本的にはオープングループの形式をとった。ここでは開始期の異なるA・B・C・C'・Dの5グループをとりあげた。つまり一つの期の一つのグループということになる。

表1は各グループの構成員数、新規参加者と継続参加者を合わせた各グループの対人理解度得点・被理解度得点の推移を示している。開始時と終了時の各成員の対人理解度得点と被理解度得点の平均点を当該グループの得点としている（なお、C'グループはCグループの成員がほぼそのまま移行して新参加者がおらず、Cの段階から見ればクローズドグループであり、C・C'で合わせて1年間グル

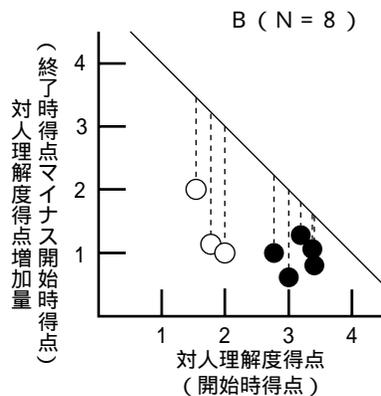


図1 Bグループメンバーの対人理解度得点。説明本文

表1. 各開発的グループにおける対人理解度得点・被理解度得点などの平均得点と標準偏差値（カッコ内数値）

開発的グループ	対人理解度得点				被理解度得点			
	開始時測定 平均得点	終了時測定 平均得点	平均得点 増加量	期待最大増 加量までの 平均残量	開始時測定 平均得点	終了時測定 平均得点	平均得点 増加量	期待最大増 加量までの 平均残量
メンバー人数 (新規+継続=合計)								
A(10名+0名=10名)	2.05(0.44)	3.80(0.39)	1.75(0.66)	1.20(0.39)	2.06(0.47)	3.82(0.40)	1.76(0.44)	1.18(0.40)
B(3名+5名=8名)	2.73(0.64)	3.84(0.43)	1.11(0.40)	1.16(0.43)	2.69(0.59)	3.83(0.44)	1.15(0.49)	1.16(0.44)
C(7名+5名=12名)	2.34(0.67)	4.06(0.21)	1.72(0.67)	0.94(0.21)	2.34(0.79)	4.07(0.36)	1.73(0.72)	0.93(0.36)
C'(0名+11名=11名)	3.93(0.41)	4.28(0.43)	0.35(0.45)	0.72(0.43)	3.93(0.28)	4.28(0.36)	0.35(0.14)	0.72(0.36)
D(6名+6名=12名)	2.43(0.48)	3.62(0.62)	1.19(0.36)	1.38(0.62)	2.47(0.72)	3.62(0.32)	1.15(0.46)	1.38(0.32)

ープ活動が続けられた。実際は、A・B・DそれぞれにA'・B'・D'というグループがあって活動を行ったが、これらのグループは成員の移動が多かったことにより、データの収集を行わなかった。

図1はBグループを例として対人理解度得点の変化を示している。BグループはAグループからの5名の継続参加者(黒丸)と3名の新参加者(白丸)の計8名で活動が開始された。開始時の対人理解度得点は図の横軸に示してある。5名の継続参加者の開始時得点は3点~4点と高く、新参加者3名の得点は2点前後と低い得点である。

Bグループが11回のセッションを終了した段階で再び質問紙によって各成員の対人理解度得点をとったが、この得点から開始時の得点を減じた値を算出した。これは既述のように、当該グループ活動による対人理解度の増加量であり、縦軸に示してある。どの成員も対人理解度の増加が見られるが、新参加者の増加量は継続参加者に比して大きい。

しかし質問紙の上限の得点が5点であるので、活動の開始時から高得点を示した継続参加者の増加量がより小さく、開始時に低得点であった新参加者の増加量の伸びが大きくなる可能性がある。図1の斜線は各成員のとりうる最大増加量を示している。各成員の丸印の上に縦に斜線まで引かれた点線は各成員がとりうる最大増加量つまり残量を表している。この残量が少なくなればなるほどグループ活動による相互理解・被理解の関係が拡大・深化したと考えられる。そして図1によると、新参加者の得点増加量は継続参加者より大きいものの、残量は継続参加者の方が終了段階ではより小さいことがわかり、後者の方が相互理解の関係が深まっていると思われる。相互被理解の関係にもほぼ同様な傾向が認められる。要するに、新参加者・継続参加者を問わず残量によって各成員の理解・被理解の度合いを統一的に測り、全体としてのグループの状態の把握も可能になる。

## (2) オープングループ活動の期を重ねる効果

対人理解度・被理解度得点を基に全体としてのグループの傾向と変化を見る。表1によると、対人理解度は各グループの得点は全員が継続参加者から成るC'グループを除いて共にほぼ2点台で、グループ全体では「顔を見たことはあるが、それ以外は知らない」あるいは「その人のことをいくらか知っている」という状態あたりからグループ活動が始まっていたことがわかる。対人被理解度は他の成員から「顔は見たことがあるが、それ以外は知らない」あるいは「いくらか知っている」と判断されていることを意味している。同じキャンパス内の学生同士ということもあるし、またAグループ以外は継続参加している成員がいることで、こうした理解・被理解の状態から活動が開始したということである。それがセッションの終了時になると理解度得点も被理解度得点も3点台後半から4点台へと上昇している。つまりグループ全体で見ると「その人のことをいくらか知っている」あるいは「その人の性格がいくらかわかる」という程度の状態になって、一つの期を終えることがわかる。

次に、残量という視点でAグループからDグループまでの終了時の変化を顧みる。表1の中項と右端に「期待最大増量までの平均残量」として示したように、全員新参加者であったAグループから出発して、Aグループが終わった段階で新参加者を迎えてグループ活動を開始したBグループ、Cグループ、C'グループは、いずれもオープングループであった。オープングループであるにもかかわらず、グループ活動が期を重ねてゆくにつれて、例えば理解度でAからC'へ1.20~1.16~0.94~0.72と上限までの残量が僅かではあるが減少し続けていくことが見られる。Cグループの次のC'グループはCグループがほぼそのまま移行して続けられたものなので、グループの得点は5点までの残量が極めて少ない状態、つまり「理解し、理解される」状態

が、この尺度で見ると限りほぼ限界に近づいていることがみられる。

むしろ残量にも頭打ちがあって残量が0点になることはない。實際上全員が5点に至ることも考えられない。またA～BとB～CとC～C'という各グループの間隔も等しくない。だが、新参加者が加わりながら継続されるオープングループであっても、成員同士の理解・被理解の関係が期毎に少しずつ広がり、深められながら進んでゆく傾向があるように見えるのは注目される\*。A～BとB～CとC～C'という各グループの間隔は等しくないが、この低減傾向は暫定・仮定的に理論方程式  $y = -0.161x + 1.42$  (対人理解度得点の場合) ;  $y = -0.161x + 1.40$  (対人被理解度の場合) で表すことも考えられよう (\* AグループおよびC'グループを含めてみて上記の傾向をあげるとすると、これは新参加者の存在というよりも、単にあるグループに低得点者と高得点者が共存しつつ期が重ねられるという条件に基づくかもしれない。だがこれではクロズドグループの期を追っての変化と同じことになる。さらにオープングループの経験を重ねて検討する必要である)。

だがDグループになって、これまで僅かづつ減少していた残量が対人理解度・被理解度ともに増加しており、このグループが他のグループと異なる特性がうかがわれた。この点についてはさらに後述する。

### (3) 特徴的成員の心理・行動

#### T S Tについて

メンバーP(女性)は、全成員が新参加者であるAグループに参加し、その年の後期にも参加してから約1年間の不参加の後、B・C・C'の諸グループに継続参加した(集計の欠けた期も合わせて計3年間参加)。このメンバーの特徴は、T S Tで見ると限り内面的変化がほとんど認められなかったにも拘わらず、参加意思を持ち続けて長期にわたって成員が入れ替わるオープングループの活動を維持した点であろう。

PのAグループ開始時のT S Tには、「気

が弱い」などいくらかの自己反省があったものの、主に学部の所属や出身地などの社会的項目と「音楽が好き」など外的事象への関心を表していた。終了時にはさらに外的事象への要求の叙述が増えるが、それにあわせて、「自立したい」・「甘えたい」、「何かしたい」・「何もしたくない」など幾分葛藤する表現もあり、わずかな変化の兆しが認められた。

この傾向はBグループ開始時のT S Tにも見られ、「疲れる」・「迷っている」と言いつつ「元気」・「楽天的」と打ち消す形の文が続く。そして終了時にはAグループの開始時と同様な外的事象への志向が示された。また、Cグループではおおむね「楽天的」・「人付き合いがいい」・「行動的」という明るい面だけを語っている。

C'グループの開始時は概してAグループの終了時と似ているが、卒業をひかえて、将来への不安が強くなった個人的状況が考えられるが、「楽天的」という表現とともに「どうなるだろう」・「何もしたくない」などの叙述がある。だが最後には「なんとかなるだろう」と結んで打ち消している。C'グループの終了時にも、「いろいろ考える」・「私は就職を考える」・「何もしたくない」と不安をうかがわせながらも「楽天的」と否定し、「絵が好き」など現実面を強調している。自己への直面化はこの段階においても十分とはいえない。

#### 集団内活動について

たとえばBグループの中で、Pは最古参のメンバーとしてグループの進行が行き詰まった時に活動を刺激する発言したり、他の成員の発言を促すなどの主導的ととれる行動が見られた。しかしその内容は外的事象への関心や「楽しい」・「きつい」などの心情を現すものにとどまっていた。したがって被理解度(他人から当人がわかる)は高まったが[3.29～4.71で増加量+1.42]が理解度(当人が他人をわかる)はより小さい伸び[3.43～4.43で増加量+1.00]を示している。

しかしC'グループでは、Pがかって属したサークルでの人間関係とリーダーシップをめぐるトラブルについて積極的に提題し、当人のみならず他のメンバーたちもサークルの運営はいかに柔軟であるべきかという反省を呼び、活発な討論が繰り広げられた。

#### メンバーPのまとめ

TSTの限りでは、P自身には顕著な変化は見られなかった。おおむね楽天的で外的事象への関心の記述が多く、不安をほのめかす文章はあっても、両者が単に並立されたままで、AグループからC'グループまでほとんど変わらずに堂々巡りしている印象を与える。グループへの参加を続けたけれども、グループ活動はPの内面の変化には効果がなかったようにもみえる。

しかし、Pはなぜこのように長期間、開発的グループに参加しつづけたのか。またそのことが当該集団活動にどのような効果をもたらしたかを顧みなければならない。ケースの内面の不安がグループによって支持された安定化されたこと、グループの中でいくらかのカタルシスを得られたことが挙げられる。それとともに、長期にわたって参加し続けるPの中に、新参加者たちがある種の当グループ活動の雰囲気をとらえ、また安定感を得ていたことをあさるだろう。これが恒常的ファクターとなり、期毎に再編成されて出入りの多いオープングループを長年にわたって継続させる動因となっていたであろう。

## 2. 下位集団別理解度の推移と特徴的成員の心理・行動

### (1) 新参加者群と継続参加者群の関係

各期の新参加者群と継続参加者群をある種のサブグループと見なし、これらのサブグループ間にどのような関係があり、それが全体としてのグループの発展にどのように関わったかを顧みる。

表1・図1のごとく、Bグループ(8名)では新参加者(3名)において、理解度得点・被理解度得点ともに大きな得点増加平均

(1.48・1.49)を示し、継続参加者(5名)では、僅かな増加(0.88・0.95)が認められた。つまり、新参加者は自己理解・他者理解に積極的であるが、継続参加者はそのいずれの面でも活動の背景に退く形で、それぞれにまとまりながら関わり合っていた。

Cグループ(12名)でも理解度得点・被理解度得点について、新参加者(7名)と継続参加者(5名)の平均増加率を比べると、Bグループとほぼ類似した傾向が認められた(2.05・1.25および1.99・1.36)。

C'グループはCグループの継続であり、成員は1名が欠けたのみで年間を通じてほぼクローズドなグループと見なされる。C'グループの理解度・被理解度の得点平均増加量についてみると、Cグループの時に新参加者のグループでは(0.5・0.3)であり、Cグループ以前からの継続参加の諸成員では(0.18・0.42)であるから、増加量は僅かではあるが被理解度が後者が上回る。継続参加者において自己開示が高まっていて他者からの理解がより増大したとみられるが、グループ全体として捉える場合、C'の期待最大増加量の残量では、全員が限界に近づいている。相互理解の高まりとともにメンバーの間の同化が進み、量よりも質の変化が期待される段階にあると見られる。統計的処理の困難な少数例ながら、BからC'へと経過的にみて特定の変化が掴めるだろう。

ところが、新参加者が半数のDグループ(12名)では、理解度増加量および被理解度増加量について、新参加者(6名)と継続参加者(6名)を対比すると、理解度得点において(1.19・1.18)、被理解度得点で(1.47・0.84)であり、理解度の増加点については新参加者と継続参加者がほとんど同じなのに、被理解度の増加点では新参加者がより大きいという、これまでのグループにない状態を示していた。観察によって補われる見方であるが、Dグループの新参加者において他人の表出を気を配って傾聴するよりも自己表出意欲の大きい者がいたことによると思われる。ま

た出席率の低いこと（メンバーの平均をとるとCグループで85%に対してDグループでは63%）もこのことに関連しているであろう。期待最大増加量への残量が、C'グループまで減り続けたのにDグループに至って新参加者の理解度得点で（C' 0.63 D1.67）被理解度得点で（C' 0.93 1.65）と増え、継続参加者でも（C' 0.82 D1.09）・（C' 0.46 D1.11）と増えている点をもみても、メンバーの参加意欲の多少がグループ活動に及ぼす影響をみることができるだろう。

## （2）グループ過程での個人内変容

個々のメンバーがグループに参加することでどのような心理的变化を示すかは、グループ活動中の表現の移り変わりを捉えるか、または活動開始時と終了時に体験的な感想をとることが考えられる。だが本研究ではグループ活動の前と後にとった、T S T（20等法）の変化をみることで自己意識の変化をグループ活動とは独立した形で捉えた。こうすればグループ活動と個人内変容を一層客観的に対比し、関連づけることができるだろう。

### T S Tの変化

個々のメンバーのT S Tの変化をある期の前後のみならず期を追って求めてゆくと、自己意識の何等かの変化を示した者とほとんど示さなかった者がいること、ある期の前後で変化してもその変化が次ぎの期まで保持されず、次の期では前の期の初期の状態に戻る者、2期にわたって無変化の後に突然変る者などさまざまである。

AグループからDグループまでの実参加者全26名中、2期（一年間）以上の継続参加者は10名であるが、この中で何等かの変化を示した者は7名である〔表2〕。この7名については、新参加時では記述の大半が社会的項目：「私は埼玉県人である」とか主に外的事象への関心・欲求・願望：「私は野球がすきです」に当たる内容で出発した4名（Y, S, T, R）は（学年が上がったこととも無関係ではないだろうが）概して社会への出立に向かったの不安の増大とそれを越えての社会参

加意欲の高まりを示した。彼等を外的事象関心型と呼ぶ。また特異反応：「私は石だ」や種々の自己評価たとえば「私はつまらぬ人間だ」など、主として心的葛藤・混乱・自我防衛から出発した3名（W, U, V）は総じて自己意識の深まりと共に自己に面と向かい、自己変容へと方向付けられることが示唆された。彼等を自己防衛型と呼ぶことにする。しかしいずれの型のメンバーの中にも途中の段階（ある期の開始時または終了時の状態）で停滞したままの者 - 外的事象関心型では社会出立の不安の増大や自信低下のまま、自己防衛型では自分との対決や自己受容に向かうことへの回避や一層手のこんだ自己防衛的構えをとる者なども認められた。これを要するに、個人の内面の期を追っての変化はおおまかな型で分けられるだけでなく、きわめてジグザグした歩みを示すことが見られた。

### グループの相異と個人内変容の関連

本研究では基本的にオープン・グループを対象にしている。しかし既述のように、部分的には期を重ねて継続参加する者もあり、またメンバーがほぼ不変のまま期を重ねたグループもあって、多少とも個人の変化をグループの違いと関連づける試みができるだろう。

BグループとDグループはその点で典型的な対比を示している。BからC'までがグループのある種の発展経過を示しているのに対して、Dグループはある意味でこの期間のみで終結しているともみえる。すなわちBは継続参加者群と新参加者群の区別が明瞭であり、両群の相互作用が示された状況で、新参加者群の対人理解度得点の顕著な増大があったことと、それに伴うメンバーのT S Tの変化が見られたことがあげられる。たとえば後述するごとく、メンバーYにおけるT S Tでは、外的対象への関心から自己へまなざしを向けることへの変化が認められた。Yはその後C'まで2年間にわたって継続参加したが、グループの対人理解度得点残量が漸減する過程で、次第に社会参加意欲を培っていった。また、メンバーWはBグループからDグルー

ブまでの2年半の間参加した。Bグループの開始時のTSTでは特異な著しく自己防衛的な叙述を行っていたが終了時には自己に素直に目を向けた文章になり、以後自己反省と疑心暗鬼を繰り返しながら、C'に至って社会参加意欲を示すようになった。C'グループでは、Cから参加した3名はCでの状態と変わらないので、質的变化はBグループ以来の継続参加者にみられたのである。Dグループについて対人理解度得点をみると、B以降漸減した対人理解度得点の最大期待値への残量もDグループに至って増大している。しかしメンバーWのTSTをみると終了時に安定化が見られるので、グループの動きとはやや離れた内面の変化があった者もないわけではなかったのである。

### (3) 特徴的成員の心理・行動

#### TSTについて

メンバーY(女性)は、Bグループに新規参加して以後C、C'の各グループにも引き続き参加した。当紀要の研究報告(臺・丹治・大熊, 1995)でとりあげたメンバーであるが、TSTの結果を顧みながら再度検討した。

表2を参照しながらTSTの叙述から主な内容をとりあげて、その変化を見る。

Bグループの開始時は、「私は旅行が好き」・「おいしい物を食べたい」などの外的事象への関心が中心で、自己内省が少なく表層的であった。それが終了時には、「わがまま」・「時々人を羨むところがある」など自分を見つめようとする構えが見られるようになる。

Cグループの開始時は、「私はわくわくしている」・「ちょっと疲れている」など感覚的な表現が多く、内省が乏しい点ではBグループの開始時に類似している。しかしそれと異なる点は、「このグループがどう進んでゆくのかたのしみである」などグループへの期待と関心がいくつか語られていることであろう。終了時は、「最近けっこう感情を表す」・「いろいろ悩みを持っている」・「今とても

意欲的である」など、いくらかの自己反省と目標への意欲が見られるようになっている。

またC'グループの開始時は、Bグループの終了時に類似し、「就職できるか心配である」・「リフレッシュしたい」と、卒業後の心配も含めてやや不安な傾向が見られるが、それも終了時には、「今、なにかをやりたい気持ちである」と社会へ向かって意欲的になっている。また、「嫌なことは嫌と言いたい」・「人に対して見返りを期待しすぎると思いません」と自他の関係に気づき、自己内省が深まっている。

#### 集団内活動について

BグループのYは、新参加者としてグループに迎えられ、開始時は、指名によって発言したりロールプレイングである役割を演じたりしたが、次第に自発的に発言することが増え、それに対して他の成員からの質疑応答が繰り返されるようになった。このことがYの理解度得点の増加(グループ全体の平均1.11であるがYでは1.29)を捉したといえる。

Cグループでは、Yはすすんで日常生活で困っている問題を提起し、それがロールプレイングで主題としてとりあげられた。また他のメンバーの問題やロールプレイングにも、自分との違いを感じたことを話すなど、他者の問題も自分に関わらせ考える姿勢がみられた。ロールプレイ後の話し合いでも、グループの進行についての的確な意見を述べるなど、Bグループの時以上にYにはグループ全体の動きを視野に入れていることがうかがえた。

要するに、Yは新参加時は外的事象への関心が主で自己内省は少なかったのだが、グループの変化過程で不安と意欲の間を行きつ戻りつしながら、自己への気づきと社会参加意欲を増していった。Yの2年間にわたるグループへの参加と理解度得点の残量がさらに減少したC'グループの状態がこの態度変化を支えたといえよう。Y自身もB~C~C'で残量は1.71~1.00~0.60と低減している。

表2 2期以上継続参加者中のT S T変化者

N \ G	A 1 - A 2		B 1 - B 2	C 1 - C 2	C 1 - C 2	D 1 - D 2	
Y			外的対事へ関心 自己を見つめる	B 1 に戻る 意欲を示す	自分への眼 やや不安 B 2 に類似 社会へ向かって意欲		単なる外的事象への関心から出発。自己への若干の反省と社会参加意欲の間を往復しつつ意欲増加傾向
W			自己防衛的逃避 反省 自己に眼を向けて	自己反省と疑心暗鬼 + 半ばはする やや表層的防衛	C 2 に類似 社会への意欲	疑心暗鬼 C 1 へ戻る やや安定化	自己防衛(逃避)から出発するが、自己へまなざしを幾らか向ける。しかし疑心暗鬼と防衛と社会参加意欲の山、谷を超えて安定化
S			自己への眼は浅い 気づく それにいくらか	B 1 に戻る 自分への不安	自分への不安 社会へ出発への不安 自分を捉えるが		自己への浅い反省から出発。だがそれに気づいて不安。社会出立の不安。自己への不安増大。
U				避ける傾向 自己への眼を いくらかの気づき 表出し他傷にも 情緒不安定を	C 1 に戻る 変化なし	居直る 自分はこちらでいいと いくらかの不安	自己防衛から出発し、情緒不安定や他傷傾向に気づくも、なお面と向かず。
T				他者関係浅い 自己への眼乏しく 不変	不変 不変	愛他的構え 眼なざし C へ戻る いくらか自己への	自己への眼なざし浅く、長期間ほとんど不変だったが、いくらか自己を顧みもなお定着不明。
V				傾向から 自己への眼を避ける 認めるよつになる 自分の防衛を	C 1 に戻る 変化なし		自己への眼をさげるところから出発するも防衛的な構えを自認する。深まりは足りない。
R	S C 的浅い自己反省 反省の量的増加	.....	A と変わらず 安定化・意欲的				浅い自己反省から出発。反省は量的に増大するも、以後変化なく安定。

#### 4. 総括

本研究は、開発的グループにみる集団力学的過程 - 集団と成員の関わり合いながらの発展を、ソシオメトリックな対人理解度尺度と文章構成式投影法のTSTを用いて捉えた。これらの査定法は、集団活動に直接結びつく集団体験内容 - 集団活動自体に影響されるものから離れた、各メンバーにとって活動外の場での調査であり、一層客観的に集団と個人心理の関連を検討することを目指した。

結果としてまず注意されたのは、中途参加者の対人理解度得点の加速度的増大であった。しかし継続参加者を含めた全体としてのグループの発展は、期待最大増加量への残量によってより有意義に示される。当開発的グループは期毎に成員が出入りするオープングループにもかかわらず、残量が期を追って低減する傾向を認めた。さらに検討せねばならないが、この傾向は開発的グループの結果を裏付けるものである。

しかし各グループはそれぞれに集団としての特色を持つ。それは特に新参加者群と継続参加者群というサブグループの関係を顧みることでも明らかになった。年間を通じてほぼ同一成員からなつたグループでは後半において、被理解度では継続参加者群でむしろ増加していたし、半数を占めた新参加者の出席率が低く、出席時には発言するだけして次回には欠席という態度が見られたDグループでは、残量が被査定グループ中の最大を示し、理解度も被理解度も増加量が顕著に抑制されるのを認めた。

要するに、グループの動きのメンバー個人への関わり方は、新参加者の人数のグループ全体の人数に占める割合、個々のメンバーの継続参加期間・固有の態度・期を重ねる間に起こる個人的条件の変化などによっても異なってくる。またおそらく当該グループの活動で得ることが少ないとの体験をもった者や自己防衛が過剰な者や他のサークルをいくつも掛け持ちにしている者などは新参加者となつ

たその期だけで、以後のグループでは不参加になる場合があると推測される。だが、当グループ活動から何かを身につけようと思ひ、期を重ねて継続的に参加する者が何人か存在して、しかも彼等の中の誰かが主導的ないしは支持的役割を演じるようになると、たとえオープングループであっても、ある程度はグループ全体がメンバー個人の自他の理解に応じた発展のあることが示された。

今後の研究については、中断者と継続者の諸条件の検討、また継続参加者とメンバーロールの関係を一層明瞭にすることが必要と考える。

#### 5. 参考文献

臺 利夫・丹治哲雄・大熊恵子 1995 開発的グループにみる対人理解度の発展 - . 中途参加者の同化を中心に - 人間科学研究(文教大学人間科学部),17,44 - 51.